



いのちをまもるPARTNERS

医療安全全国共同行動

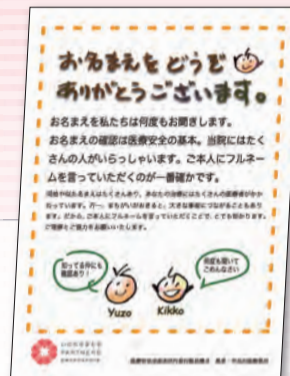
減らそう！有害事象 多様な主体の参画で 11

行動目標 8

患者・市民の医療参加

～患者と医療者のパートナーシップ～

患者・市民が医療に参画できる活動の実施を参加登録病院に促し、ケアの質・安全と相互信頼を向上させることを目的に、行動目標8が設定された。この行動目標の性質上、推奨する対策は設定していないが、医療安全全国共同行動のホームページ (<http://kyodokodo.jp/>) では、各施設の成功例や課題点などを参考情報として提供している。患者参加に取り組んでいるもののなかなか成果が出ない、活動参加の糸口が見つからない病院などは、これらを参考にし、その病院に合った活動を進めてゆくとよい。今回は、支援チームが提供している参考モデルを紹介する。



名前確認ポスター

モデル 1

フルネーム確認

患者の取り違えは、日々の診療で起こり得る医療ミスだ。病院には数千から数万人の患者が登録されており、その中には類似氏名の患者も多数存在する。1992年11月、熊本で患者の取り違えが起り、肝臓の一部を切除してから誤認に気が付く事故があった。また、99年1月には、横浜でも同様の事故が起り、手術が終了するまで取り違えに気が付かなかった。これらの重大事例のほかにも、日常

的な診察の中で患者誤認に関するヒヤリ・ハット事例が報告されている。

医療従事者の間では、有効な対策として「医療者が名前を尋ね、患者がフルネームで答える」方法が、既に知られている。しかし、患者にはその必要性が理解されず、何度も名前を確認されるのを嫌がる場合もある。医療者と患者の双方が、名前確認の意義を認識し、確実にフルネーム確認を行うことで、患者誤認を減少させることが必要だ。

■ 実施方法

- (1) 患者誤認リスクの評価 (2) 名前確認の場面設定
- (3) 患者と医療者の協同によるフルネームの確認の方法をルール化

まず、各施設で患者誤認のリスクがどの程度潜んでいるかを洗い出す。アセスメントの方法としては、登録患者の中で、同姓や類似の氏名を持つ患者数を確認。それらの患者間で取り違えが報告されているかを把握する。また、医療者が「〇〇さん」と名字だけを呼び掛けて確認を行っている場合は、間違っただけを伝えて患者が返事してしまった事例がないかなどを調査する。

次に、フルネームで確認を行う場所とタイミングを院内で統一する。例えば、①外来診察・処置②

手術室③検査④点滴・注射⑤輸血⑥採血⑦IDカードの受け渡し⑧処方せんの受け渡し⑨内服薬投与時-など。

最後に、フルネーム確認の方法をルール化する。①医療者側から患者に声を掛ける②初対面の場合は、医療者から自己紹介(職種と名前)をし、「安全確認のため、お名前をお願いします」と、依頼する。③患者が自分の名前を言ったら、「ありがとうございます」と声を掛ける-など、施設に合った方法を考え、共通認識として周知させる。

モデル 2

院内患者図書室の設立

医療者と患者との間には、医療に関する知識に大きな差がある。支援チームはモデル2として、患者が医学・医療の知識を得やすくし、医療者とのコミュニケーションを促進することを目的に、病院内の患者向け医療図書室の設置を推奨する。病院の規模や運営形態によって図書室の役割や情報サービス内容も異なるので、ホーム

ページに掲載されている指針を参考に、各病院の状況に応じたスタートポイントから始めるとよい。



東邦大森病院「からだのとしょじつ」

医療情報提供のメリット

【患者】 自分の体や病気を理解することで、医療者とのコミュニケーションが円滑になる。そして、自分が望む医療と、その長短所を学び、選ぶことが可能になる。治療効果を高めるために、自分ができることを見つけられるようになる。

【医療者】 患者に予備知識ができ、知りたいことが整理される。その結果、患者からの質問に具体的な説明ができるようになる。相互の対話が成立しやすくなるほか、治療における患者との共同作業が行いやすくなる。

モデル 3

患者参加による転倒転落の防止

日本医療機能評価機構によると、2007年に報告された医療事故1266件のうち、転倒と転落は294件に上り、全体の約25%を占める。こうした事故を防ぐために、支援チームは転倒転落の患者への啓発活動を行うことを推奨している。転倒転落は患者側の要因が大きいので、患者や家族がリスクを理解することで、事故発生

のリスクを減少することができる。まずは、共同行動が提供する映像教材や市販の視聴覚教材を利用するとよい。これらの教材をできるだけ多くの患者に入院時に視聴してもらう。また、患者が見やすいように、ポータブル機材を用意したり、ベッドサイドテレビで放送するなどの工夫も有効だ。

医療の質・安全学会パートナーシッププログラム代表
東京海上日動メディカルサービス・メディカルリスクマネジメント室主席研究員

山内桂子先生



安全で質の高い医療のためには、患者・市民の医療参加が必要だという認識が全国の医療機関に広まりつつあります。しかし、何から始めてよいのか分からない、あるいはどのような仕組みをつくらればよいのか分からないなど、医療機関の中の患者参加は思うようには進展していないのが現状です。私たちの提供する情報や支援ツールが、活動を始めるきっかけや、活動が円滑に進む手助けになればと思います。まずは、小さなことからでも患者参加に取り組んでいただき、その途中経過や結果をぜひ、私たちに教えてください。ホームページで紹介し、全国の参加登録病院で活用させていただきたいと思っています。

■ 利用できる視聴覚教材 ■

「転ばぬ先に」
作成・提供：飯塚病院／NDP
価格：無料
問い合わせ：<http://www.ndpjapan.org/>

「笑顔のために」
販売：パラマウントベッド
価格：15000円(税込み)
問い合わせ：<http://www.paramount.co.jp/>

「転ぶはずはない」と思っているあなたに」
販売：安井電子出版
価格：29400円(税込み)
問い合わせ：<http://www.yasui-ep.co.jp/>